ISSN 2188-3343

JCRS Japanese Coral Reef Society

70

日本サンゴ礁学会ニュースレター　2016年8月

Newsletter of Japanese Coral Reef Society

contents　page

「パラオ熱帯生物研究所日誌」再確認のご報告	2
日本サンゴ礁学会の法人化について	2
日本サンゴ礁学会第19回大会のお知らせ	3
日本サンゴ礁学会 2015-2017年期 評議員会 議事録ダイジェスト	4
第13回国際サンゴ礁学会(13th ICRS) 参加報告	5-6

報告

「パラオ熱帯生物研究所日誌」再確認のご報告

学習院大学大学院人文科学研究科修士課程　佐藤 崇範　satoh.takanori73 @ gmail.com

日本におけるサンゴ礁研究の歴史を考える際、パラオ熱帯生物研究所の存在は大変重要な位置を占めています。日本が委任統治していた当時のパラオに、昭和9(1934)年6月に設立され、昭和18(1943)年3月に閉鎖された研究所の活動期間はわずか10年間と短いものでしたが、その研究成果は研究所の英文学術誌Palao Tropical Biological Station Studiesなどで世界に発信され、高い評価を受けました。研究所に派遣された延べ27人の日本人若手研究者のパラオでの日常の様子は、和文雑誌「科学南洋」や同窓会誌「岩山会会報」などで垣間見ることができます。さらに岩山会会報を詳細に読んでいくと、当時、欠かさず記入していた「研究所日誌」が存在したことがわかりました。この日誌は研究所閉鎖時に研究員が持ち帰り、彼らの手元で順番に保管されていましたが、いつのまにか所在不明となっていました。

そこで日誌の行方を捜索していたところ、大森 信先生より、先生の恩師でありパラオ熱帯生物研究所の研究員であった元田 茂先生のご自宅の資料整理をするとの知らせを受け、2015年11月21日に同行させていただく機会を得ました。そして、元田先生のご子息である進氏の許可を得て、大森先生とともにたくさんの蔵書や文書資料を探索したところ、その中から、「パラオ熱帯生物研究所日誌」を見つけましたので、簡単にその概要を紹介します。

「パラオ熱帯生物研究所日誌」は、日誌だけではなく、関連する原稿や地図、後年に清書されたものなどと一緒にまとめて簡易製本された資料群となっています。日誌が書き始められたのは、設立時からではなく、元田先生がパラオに滞在されていた昭和11(1936)年5月4日からで、研究所が閉鎖されて日本海軍の総合研究所に引き渡された昭和18(1943)年6月20日までほぼ毎日記入されていますが、「無事」と書かれただけの日や、日付が未記入で「欠」となっている個所もいくつかみられます。また日誌とは別に、昭和8年12月から昭和18年6月までの特記事項について、「重要事項抜粋」として書き出してあります。日誌を記した研究員は7名で、各々がその滞在期間に記入し、引き継いできたようです。

日誌の内容は、人物往来、研究員の状態(病気など)、事務的記録、訪問者の記録、調査研究の記録や日々の雑感など多岐にわたり、研究所の活動をより詳細に知ることができるだけでなく、当時のパラオの状況を知る歴史資料としても大変価値が高いと考えられます。

現在、「日誌」は元田 進氏より大森先生に移譲され、保存･管理のための作業を進めている状況です。サンゴ礁研究の歴史を理解し、この研究分野がさらに発展していくための貴重な資料として、今後有効に利用できるでしょう。日誌の公開は今しばらくお待ちください。

写真：「パラオ熱帯生物研究所日誌」資料群の表紙

最後になりましたが、この貴重な資料を提供していただいた元田 進氏をはじめ元田家の方々に厚く御礼を申し上げます。

参考文献::大森 信(2002)パラオ熱帯生物研究所. 日本におけるサンゴ礁研究I: 7-12

日本サンゴ礁学会の法人化について

日本サンゴ礁学会は、サンゴ礁の地形･地質、多様な生物群集、物質循環に加え、沿岸で生活する人々の暮らしや環境を対象とした調査･研究や保全活動の推進を掲げて、1997年11月に設立されました。世界的なサンゴ礁の白化や劣化が顕在化した時期と重なり、本会活動への賛同者が着実に増加し、200名余りだった会員数は現在では600名を数えるに至っています。

サンゴ礁生態系は、研究や保全活動に携わる者だけでなく、豊かな海洋自然環境の象徴として社会的問題に関わることも少なくありません。客観的かつ俯瞰的に、科学的データと考察に基づいた正しい情報を発信し続けることが、本会に期待された社会的責任です。

設立以来、地学、生物、環境、人文社会など、サンゴ礁に関わる多様な分野の会員によって本会の活動が支えられてきました。異分野間の相互理解を深めるための口頭発表の一会場開催や、新学術領域創出など、学会のさらなる発展が模索され続けています。しかしながら、設立当初の有志の会から広く社会に開かれた学会へと成長する上で、内外より組織的な成熟が求められてきました。

2015年7月には日本学術会議の協力団体として認定され、本学会が学術団体として広く認知される基盤ができました。このような背景のもと、2015 年4 月に「日本サンゴ礁学会将来構想タスクフォース」が発足し、学会改革の方向性についてオープンな議論が始まりました。7月には、「学会見直しワーキンググループ」を立ち上げて、現状の問題分析と改革の必要性について検討が進められ、学会の社会的責任を果たすために法人化が不可欠であるとの結論が得られました。これを受けて、2015年11月に開催された第18回大会時の総会では、法人化を前提とした学会改革の検討に入ることが了承されました。2016年4月に「学会改革･法人化ワーキンググループ(以下、法人化WG(座長:会長))」および組織体制、事務局運営および各委員会活動に関して検討するサブワーキングループが設置されました。

法人化WGにおける初めの検討課題は、本会のミッションの再確認でした。サンゴ礁を対象とするわが国における唯一無二の学術団体として、研究者間における成果の共有とともに、様々な保全活動の推進について学術的な視点で客観的に解析する本学会設立のミッションが改めて確認されました。また、学会内部での同好会的な交流だけでなく、サンゴ礁に関する正しい情報を求める一般社会に対して適切に発信する体制の構築の必要性も指摘されました。

研究と保全活動のバランス、沖縄と首都圏の活動拠点の分断、責任ある役員体制など、本会の抱えている様々な問題もあぶり出されました。しかしながら、これらの問題を、分野を横断する研究者と保全に関わる人材のチャネル、有望な若手会員、実験室とフィールドの連携といった本会の特徴を活かす制度設計によって乗り越える検討が続けられています。

2016年12月に那覇市で開催される総会において、法人化の青写真を提示し会員の皆様のご賛同を得る予定になっています。日本サンゴ礁学会の持続的な発展について、ご理解、ご協力をお願いいたします。

2016年8月

日本サンゴ礁学会　会長　　鈴木　款

(文責:久保田 賢･鈴木 款･茅根 創)

JCRS 日本サンゴ礁学会 第19回大会のお知らせ 19th meeting

日本サンゴ礁学会第19回大会を、2016年12月1日(木)～12月4日(日)に那覇で開催します。

皆様のご参加をお待ちしております。なお、12月1日は評議委員会および自由集会です。

第19回大会実行委員長：琉球大学熱帯生物圏研究センター瀬底研究施設　山城 秀之
電話：0980-47-6072　e-mail: jcrs19th@gmail.com　大会HP：http://www.jcrs.jp/wp/?page_id=2781

会場	沖縄タイムスホール(3階)

〒900-8678 沖縄県那覇市久茂地2-2-2
沖縄都市モノレール県庁前駅より200m、徒歩5分
http://www.okinawatimes.co.jp/note/building/index.html
電話：タイムス管理部(098-851-5185)

一般公開シンポジウム　12月4日(日) 13:00-15:30

「北琉球におけるサンゴ礁、研究・保全の現状と課題」

南西諸島の全域でサンゴ礁は見られるが、調査研究と保全活動が活発な慶良間列島・先島諸島と比較して、大隅諸島・トカラ列島・奄美群島および沖縄諸島北部の情報は充分とは言えず、その保全活動の規模も小さい。気候変動下における亜熱帯から温帯への漸進帯としてこれらの地域の情報は重要で、保全活動の活性化も急がれる。南西諸島のサンゴ礁理解を深め、このような南北格差を解消することを意図して企画したものである。

大会参加・研究発表登録

大会参加、研究発表、懇親会の参加に関する各種登録の詳細については、第19回大会Webサイト（http://www.jcrs.jp/wp/?page_id=2781）をご覧ください。なお、学会員の発表希望者は、通常発表（口頭・ポスター）の中から、お一人いずれか1つだけ登録できます。

1. 登録期間・方法・形式

● 参加登録と発表登録（口頭発表・ポスター発表）

大会参加登録料の事前振込と、Webサイトからの大会参加申込の双方を行ってください。大会webサイトは学会webサイトからご覧いただけます。登録期間は、8月8日(月) 10:00～9月23日(金) 17:00です。事前振込手続きが困難な海外からの希望者に限っては、ウェブサイトから事前の申し出があれば、事前振込の登録料のまま、当日支払をお選び頂けます（現金払いのみ）。該当者は海外研究機関に所属する研究者や学生、留学生等です。締切りの日時は厳守ください。ご不明な点がある場合は、メール（jcrs19th@gmail.com）にてお問い合わせください。

2. 発表形式

口頭発表とポスター発表の権利は、学会の規定により学会員に限定されています。

● 口頭発表

講演時間は質疑応答を含めて1人15分です。発表機材として、PCと液晶プロジェクターを用意します。

● ポスター発表

A0サイズ(縦119cmx横84cm)までのポスターが貼れる大きさのパネルを設置する予定です。この範囲に収まるよう、ポスターの大きさを設定してください。

※プログラム編成の都合上、口頭発表またはポスター発表への移動をお願いすることがあります。

3. 大会参加登録料

当日支払は割高になります。9月25日（金）17:00までに事前振込下さい。

		事前振込		当日支払	
		一般	学生	一般	学生
登録料	会員	5,000円	3,000円	7,000円	5,000円
	非会員（全日）	7,000円	5,000円	8,000円	6,000円
懇親会費		5,000円	3,000円	－	－
大会発表要旨集（印刷版）	会員	500円	500円	1,000円	1,000円
	非会員	500円	500円	1,000円	1,000円

※高校生以下は、無料です。
※サンゴ礁保全活動ポスターを初めて出展なさる団体関係者は2名まで参加登録料を無料とします。
※発表要旨集の部数には限りがあるため、大会当日には売り切れの可能性があります。

4. 参加費の事前支払

● 振込用紙を使った郵便局からの入金の場合

振込金額：「大会参加登録料」欄を参照し、該当する金額を以下の口座へ入金して下さい。
口座名称：日本サンゴ礁学会第19回大会実行委員会
（ニホンサンゴショウガッカイダイジュウキュウカイタイカ）
口座記号番号：01750-4-145116
通信欄の記入事項：氏名、所属、連絡先TEL、e-mail

※振込手数料は、各自ご負担下さい。
※複数の方がまとめて振り込まれる場合、上記の「通信欄の記入事項」へ全員分の情報を明記して下さい。

● ゆうちょ銀行ATMおよび他銀行等からの入金の場合

振込金額：「大会参加登録料」欄を参照し、該当する金額を以下の口座へ入金して下さい。
口座名称：日本サンゴ礁学会第19回大会実行委員会
（ニホンサンゴショウガッカイダイジュウキュウカイタイカ）
店名：一七九（イチナナキュウ）店(179)、
口座種別：当座
口座番号：0145116

※振込手数料は、各自ご負担下さい。
※参加登録者別に入金をお願いします。

出会いの場・語らいの場

1. 自由集会（企画募集）

1集会2時間以内で、自由に企画いただけます。採択された集会に対して、大会実行委員会が場所を提供いたします。大会参加申込の締切り9月23日（金）17:00までにメール(jcrs19th@gmail.com)でお申し込みください。メールの件名に「**JCRS自由集会**」と明記ください。

● 日時：12月1日(木) 18:00－20:00、
12月2日(金) 18:00－20:00

● 会場:2会場(各12名会議室、プロジェクタ·スクリーン使用可)
上記のタイムスビル内会議室以外に近隣に別途確保する予定です。

2. サンゴ礁保全活動ポスターコーナー（出展団体募集）

学会の社会連携を推進するため、サンゴ礁の保全活動を行うNPO等（非営利団体、任意団体や個人も歓迎）のポスターコーナーを12月3日（土）に設置します。ポスターを初めて出展する団体関係者は、2名まで大会参加登録料を無料とします。それ以外の方は、通常どおり登録料をお支払ください。大会参加・出展登録は、8月8日（月）10:00～9月23日（金）17:00に大会Webサイトからお申し込みください。

その他

1. 若手優秀発表賞について

35歳以下の学会員によるポスター発表を対象とした「若手優秀発表賞」を設けています。本賞にエントリーを希望される方は、Webサイトの大会参加申込時にお申し出下さい。なお、以前に受賞された方もエントリーいただけます。

2. 発表要旨の提出について

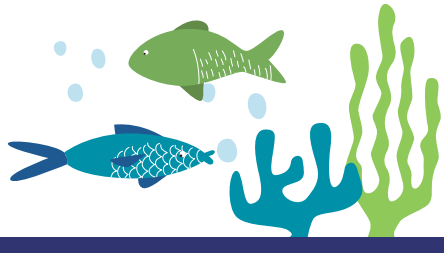
締切りは2016年10月14日（金）17:00です。厳守をお願いいたします。要旨集原稿作成要領は、第19回大会Webサイトへ掲載する予定です。要旨のひな形（Wordファイル）をダウンロードできます。レイアウトの統一にご協力下さい。

3. 託児サービスについて

特に業者の紹介等は行いませんので、各自での手配をよろしくお願いします。

4. 宿泊施設について

会場周辺に多数ございますので、各自でご手配下さい。
※**那覇マラソン**が12月4日（日）に開催されるため、12月2、3日（金、土）の宿泊は予約が殺到することが予想されます。航空券を含め、早めの確保をお願いします。



日本サンゴ礁学会　2015-2017期 評議員会

議事録ダイジェスト

作成：広報委員 中嶋亮太

日時：2016年7月3日（日）14:00－18:00
場所：東京大学理学部1号館 311室

■ 出席者（18名）：鈴木 款（会長）、日高 道雄（副会長）、茅根 創、灘岡 和夫、服田 昌之、中井 達郎、中野 義勝、梅澤 有、山城 秀之、Agostini Sylvain、久保田 賢、熊谷 直喜、佐藤 崇範、鈴木 利幸、中村 隆志、山口 徹、山野 博哉、湯山育子

■ 委任状（11名）:井上 麻夕里、菅 浩伸、酒井 一彦、新里 宙也、鈴木 豪、中村 崇、浪崎 直子、波利井 佐紀、藤村 弘行、安田 仁奈、渡邊 剛

■ 書記：湯山 育子、梅澤 有

■ 会長挨拶

学会として、アジア全体で日本サンゴ礁学会がどのような立場で対応していくのか、2020年の国際サンゴ礁シンポジウム(ICRS)の誘致をどうしていくのか、若手の育成をどうするか、法人化を含め新しい学会のあり方を議論していく必要があります。集中して、実りある議論をよろしくお願い致します。

■ 議事

1. 2015-2016年度活動報告及び活動計画

① 事務局報告（茅根事務局長）

- 会員動向（2016年 6月 24日現在）：会員600名（2015年11月末時点より、通常会員12名、外国会員2名、学生会員8名、会友会員2名の減少）。
- 会計報告：2015-2016年度の収入 378.3万円、支出 284.2万円、単年度収支 プラス94.0万円。次年度への繰り越しは565.6万円。
- 若手会活動費3万円を新たに盛り込む。
- 2015度予算（見込み）：収入358.0万、支出323.0万円

② サンゴ礁保全委員会（中野委員長）

- 沖縄のサンゴ礁の大規模開発を考えるワークショップを品川にて開催。
- 第18回大会自由集会にて全体会を開催。
- 各地におけるサンゴ礁の攪乱、白化状況について情報収集と共有化を検討。
- 美ら海研究センター開催のシンポジウムや沖縄県サンゴ礁保全推進協議会主催の「サンゴ礁ウィーク2016」等への後援等、他組織との連携を実施。

③ 学会誌編集委員会（服田委員長）

- 編集委員の体制の見直しを検討。
- 英文誌 Galaxeaと日本サンゴ礁学会誌で複数の論文を受理、審査中。

④ 広報委員会（梅澤委員長）

- ニュースレター（NL）No. 68と69発行。
- ホームページ作成・更新。
- NLのパスワード解除によるダウンロード数の上昇をうけ、今後も解除を継続。
- 13th ICRSで日本サンゴ礁学会のブースを運営。配布物品としてクリアファイルを作成。残部（650部）の配布方法についてアイディアを募集中。

⑤国際連携委員会（カサレト委員長　代理：鈴木 利幸）

- 13th ICRS期間中に開催された評議委員会に参加。
- ICRS期間中に若手渡航支援授与者に授賞式を挙行。
- 次回14th ICRSの開催候補地については現在未定。
- 日本学術会議より、イスラエル科学・人文アカデミーとの協働について依頼をうけ、日本サンゴ礁学会19回大会開催日(12月1日)に、イスラエルのグループ(代表: Yossi Loya氏)とのジョイントシンポジウムを企画。

⑥ 学会賞委員会（井龍委員長 代理：灘岡）

- 2016年度の学会賞への推薦は0件、川口奨励賞への推薦は1件。現在選考中。

⑦ 調査安全委員会（中井委員長）

- 第18回大会期間中に自由集会「サンゴ礁におけるフィールドワークの活性化と安全確保の両立のために」を主催・開催。
- 「SCUBA潜水のスキルと資格」について情報収集と意見交換の場の設定を検討。潜水調査を行う日本人・外国人研究者に対する労災等について協議を実施したがグレーゾーンが多く、今後対策を講じることが急務であることを確認。

⑧ 企画委員会（灘岡委員長、鈴木 款会長）

- 次回14th ICRS（2020年）の開催をフランスと日本に期待したい、というICRS評議員の意向を受け、ICRSの誘致・開催に関して協議。日本での開催はJCRSが国際的にサンゴ礁研究を主導していくうえで意義深いが、2020年に東京オリンピックが開催予定のため、環境省や企業からの協力を受けづらく、大規模な国際会議を開催できる場所は名古屋と京都に限られる。また、準備期間が法人化への移行期と重なり関連業務が増加する点、会員の中での議論が十分でない点等から難しいと判断。ICRS開催による利点を作るための新しいコンセプトを戦略的に明確にし、それを実現するための運営体制を作ることができることを前提に、15th ICRS(2024年)の開催誘致の是非について議論を継続中。

2. その他報告／審議事項

- 地球惑星科学連合より協賛へのお礼。
- 日本熱帯生態学会との連携を継続。
- 日本学術会議から若手研究者ネットワークへの登録依頼。樋口 富彦会員、山崎 敦子会員が対応。
- 育志賞への推薦を継続。
- 沖縄研究奨励賞への推薦依頼。
- 2015年度の前回大会の決算報告。開催地となった慶応大による補助（会場費無料）および高野 貴士会員による協賛企業の勧誘により黒字決済。

3. 2016年度 19回大会準備状況（山城大会実行委員長）

- 2016年12月1-4日　沖縄タイムスホール（3階）で開催予定。
- 一般公開シンポジウムを12月4日（日）の13時～15時30分に開催予定。
- 大会への参加・発表は学会ウェブサイトから登録。登録期間は8/8（月）10時～9/23（金）17時。発表要旨の〆切は10月14日（金）17時。
- 近年、参加・発表人数が増える一方で、短い学会開催期間や1会場方式といった枠組みは変わっておらず、ポスター発表数の大幅な増加（口頭：ポスター＝1:2）を招いている。昨年、導入した企画セッションの是非について討議。

4. 法人化について

- 法人化スケジュールの報告
  2015年12月　総会（法人化について議論の承認）
  2016年7月　評議委員会（法人化後の学会体制を承認）
  2016年12月　評議委員会（法人化後の体制、作業の承認、選挙の細則変更の承認）
  2017年3月　事務局設置（会員管理、経理体制の整備）
  2017年6月　選挙（評議員⇒法人化後は代議員）、定款（案）承認
  2017年11-12月　評議員会⇒代議員会（法人設立承認⇒登記手続きへ）。会計年度を9-10月〆に変更
- 学会の組織体制の検討
  学会全体の選挙で選出された代議員と、会長（もしくは理事会）推薦による代議員で代議員会を構成し、代議員が理事を選任（ただし、理事は代議員から選ばなくても良い）。
- 法人化後の各委員会の名称や構成について検討
- 物理的な事務局の設置場所の検討。

評議員議事録および各委員会報告の完全版と、学会会計報告の詳細は、学会ホームページからダウンロードして閲覧していただけます。パスワードは、学会メーリングリスト(sango-ML)にてお知らせ致します。

第13回国際サンゴ礁学会(13th ICRS) 参加報告

2016年 6月19日-6月24日　ハワイコンベンションセンターで開催

13th ICRS全体の様子

琉球大学　栗原 晴子　harukoku@sci.u-ryukyu.ac.jp

写真１：メイン会場の様子

2016年6月19日 ～24日 の 日 程 で「Bringing Science to Policy」というメインテーマを元に、第13回国際サンゴ礁学会（13th ICRS）がハワイ（オアフ島）のコンベンションセンターにて開催されました。本大会には実に89か国から2446名もの研究者らが集まり、サンゴ礁に関わる生物や生態学に関わる内容からその保全や政策などの社会科学的内容まで、多岐にわたる口頭発表（1587件）、及びポスター発表（721件）が、88のセッションで行われました。ちなみに自国開催ということもあり、アメリカからの参加者が最も多く約50%、次いでオーストラリアから15%、3番目に多かったのが日本からの参加者で4.2%（102人）だったそうです。

大会期間中は、毎朝8:00からプレナリーセッションに始まり、口頭発表の後18:00-19:30までポスターセッション、さらに多くのワークショップが夜の21:00までびっしり詰まっており、中々のハードスケジュールでした。さらに14のセッションが会場のあちらこちらで同時開催されており、人々は、お目当ての口頭発表を聞くために、携帯電話などで利用可能な大会専用のスケジュール管理アプリを駆使しながら、部屋から部屋へと大移動していました。そのためか、全ての会場の聴衆者の人数が常に如実に変化し、「注目されている研究者や研究内容」を知る、ある意味で良いバロメータのようにも見えました。ただ個人的には大賑わいを見せていた「大御所研究者」の多くはレビューのような発表が多く、観客がまばらな会場で聞いた発表内容の方が新鮮で将来性のあるものがあるように感じましたが、皆様はいかがでしたでしょうか?

大会の後半では、[Adaptation, Genetics, Selection]、[Coral Reef fish and fisheries]、[Remote sensing /Emerging tools]など幾つかのトピックにわけて、セッションの総まとめがなされました。前回大会に引き続き、気候変動やサンゴ礁環境の劣化によるサンゴやサンゴ礁への影響に関連した内容が多く発表されていた一方で、今大会ではさらにこれら環境やサンゴ礁生態系の劣化を今後どのように保全するか、その対策の手法や政策に関する発表内容が多いのが特徴だったように感じました。またその好例として、パラオで最近制定された「外国漁船による商業ベースの漁業の全面禁止」などの政策が何度も紹介され、本大会はパラオに始まりパラオで終わった大会でもありました。

大会全体の雰囲気は、前回のケアンズ大会がまるで「ロックスター」のコンサートのような華やかさがあったのに対して、今回の大会は様々な点で実に簡易化されているという感じがしました。飲食については、「少し簡素化し過ぎでは」、という声も多く聞かれましたが、大会の運営そのものについては行き届いており、アメリカらしい効率化を図った大会だという印象でした。ただ、時折サプライズも仕掛けられており、懇親会でのQueenの曲の替え歌 "Resilience Rhapsody" [♪～Too late it's heating up ~ Goodbye zooxanthellae, you've got to go. Gotta get you out of here and go alone ~♪] は傑作でした!

写真２：ポスター会場の様子

写真３：エントランスに飾られたアート作品

最後に、4年後の大会の開催場所がフランスか日本かとのアナウンスが流れましたが、どこになるかは決まらず閉幕しました。次回大会がどのようになるのか、今から楽しみです。

JCRS ブースの紹介

広報委員，琉球大学理学部　本郷 宙軌　g123001@sci.u-ryukyu.ac.jp

写真１：ブースの様子

今大会でも日本サンゴ礁学会はブース展示を行ないました。ブースでは、集客力を高めるために、学会誌*Galaxea*のPRポスターと日本のサンゴ礁に関する特徴をまとめたポスターを掲示しました。今回の出展にあたり広報委員では、前回のケアンズ大会で使用したポスターをもとに、国内の最新の研究成果を盛り込んだ改訂版の作成に取り組みました。例えば、日本ならではの高緯度サンゴ群集や裾礁ならではの陸域影響などについて学会員の成果を中心に紹介しました。さらに、このポスターをクリアファイルに印刷し、訪れた方々に配布しました。

ブースでは13th ICRS 渡航費支援採択者の10名と評議員経験者がコンビを組む2名の当番制にてPRに務めました。ブースには様々な国から多くの方々が訪れました。訪れた方の中には、2004年の10th ICRS沖縄大会に参加した思い出を話される方や知っている日本語をいくつか披露される方もおり、ブース担当者との交流の場も見受けられました。期間中は学会員の多くの方が訪れ、しばしば近況報告と憩いの場になることもありました。

今回のブースではいろいろと考えされられることがありました。前回のケアンズ大会でクリアファイルを配布した際は、飛ぶように無くなったため、今回は600部以上用意しました。最終日には全て配布出来たものの、クリアファイルの需要が減っているように感じました。日本国内では書類のやりとりはまだまだ多いと思いますが、国外ではペーパーレス化が進んでいるのかもしれません。例えば、大会プログラムは冊子体で配布されましたが、発表要旨はオンライン版にて配布されています。さらに、この大会プログラムもアプリをダウンロードすることで不要となっています。また、ある人は、地球環境に配慮してかプラスチック製品は使いたくないため、「クリアファイルは要らない」と言っていました。今回、作成したクリアファイルはポリプロピレン製でしたが、今後は植物系生分解性フィルムを採用し、日本サンゴ礁学会として地球環境を考えたPR活動を行なう必要があります。つきましては、PRグッズおよび効果的なPR方法のアイデアをお持ちの方は広報委員までご一報をお願いいたします。

今回のPRを通して挙がった課題をまとめたうえで、次回大会においてもブースを設けたいと考えています。今後も日本サンゴ礁学会のPRに務め、国際的な知名度を高められるように取り組みたいと考えています。

写真２：配布したクリアファイル

13th 渡航支援：授賞式と受賞者レポート

国際連携委員会　カサレト ベアトリス　dcbeatr@ipc.shizuoka.ac.jp

JCRS国際連携委員会の推進により、本学会は13th ICRS参加のために、合計10名の大学院生と若手研究者（40歳以下で日本の大学の大学院生やポスドク研究者）に渡航費用（10万円）を支援しました。

2016年1月13日に支援内容がJCRSホームページで発表され、審査は以下の5名の会員によって行われました。鈴木 款 博士（日本サンゴ礁学会会長）、日高道雄 博士（副会長）、灘岡 和夫 博士（企画委員会委員長）、茅根 創 博士（事務局長）、カサレト ベアトリス 博士（国際連携委員会委員長）。審査は提出された書類（発表要旨と履歴書、ICRSへ参加するための研究テーマ、研究活動、学会参加の動機）に基づき、各審査委員の持ち点10点を合計する50点満点の採点方式によって行なわれました。最終的な決定は指導教員の許可及び推薦状によって行なわれ、ランキング上位10名を選択し、4月21日に受賞者をJCRSホームページで発表しました。大会参加後、受賞者には研究発表の結果や参加してのレポートを提出してもらいました。

大会中の6月23日に授賞式を行ないました。まず、カサレト国際連携委員長が選考過程について説明した後、受賞者へ「研究者としての心構え」や「目指す将来像」についてエールを贈りました。さらに、「今後もJCRSに積極的に参加するとともに学会に貢献する人材になって欲しい」と強く要望しました。続いて鈴木会長がスピーチを行い、証書を授与しました。グループ写真の撮影に続き、受賞者から感想を含めたスピーチがありました。最後に茅根事務局長から祝福のメッセージが贈られました。授賞式には多様な国から研究者や受賞者の同僚、JCRS会員、科学者を含む30名が参加しました。

大会中、国際連携委員会は受賞者の研究発表を聴講することで、受賞者の活動の様子を追いかけました。今後、社会の発展と成長を担う次世代の若手研究者へと成長する過程を垣間見ることが出来、本学会として誇りに思いました。

写真１：表彰式集合写真

受賞者のレポート（ダイジェスト版）を紹介します。

伊藤 早織（北海道大学）：ICRSでのポスター発表では、自身が専門とする分野だけでなくサンゴ礁を取り巻く幅広い分野の研究者と交流し議論する中で新たな考えや知識を得ることができ、これまで見えていなかった多くのことに気づかされました。今回ICRSにて発表した内容は、発表を通して得られたことを発展させて今後国際雑誌に投稿したいと考えています。

国広 潮里（琉球大学）：待っているよりも自ら積極的に声をかけていこうと気合いを入れて発表に臨みました。その結果、10人の方が足を止めてくださり、私のつたない英語でのポスター発表を聞いてくださいました。ポスターの説明を聞いてくださった多くの方が*Waminoa*属と宿主、そして共生藻との関係について、興味深いと言ってくださり、感想や意見を頂くことができました。そのことから、*Waminoa*属の研究はサンゴ礁の生物多様性分野に止まらず、共生藻との関係性においても興味深い研究課題であることを少しでも世界に発信できたと考えています。

湯淺 英知（宮崎大学）：ICRSにおいて今後私の研究に取り入れたいと考えている解析手法や関連した技術を用いた最先端の研究発表を聞くことができ、私の研究を今後進める上で大変参考になりました。論文化されていない最先端の研究は今回参加していなければ知ることができず、発表を聴けたことは貴重かつ有意義なものでした。

水山 克（琉球大学）：マイクロプラスチックの環境指標としての可能性、砂浜の増減の定量化に関するこれまでの文献、海面上昇に伴う潮間帯構造の変化などについてのコメントは、今後の解析、研究計画を考える上で非常に有用でした。生活排水と農業排水を区別して議論し、軍事演習による化学汚染の影響について考え、土壌堆積の定量化手法の検討など、自身の研究を細分化してさらに洗練するために重要な発表が数多くあり、また沖縄においても取り組むことのできる重要なテーマが強く印象に残りました。

中村 将平（琉球大学）：とても緊張していましたが、様々な方々からの後押しもあって研究の成果を堂々と見せつけることができてとても満足しています。他の発表は、それぞれフォーカスしている部分が違っていて、そこから生まれる結果が多岐にわたっていき、とても勉強になりました。

Vu Manh Hung（静岡大学）：初めて国際学会に参加しました。短い時間内に自分の考え方を伝えるいい訓練になりました。また、自分の専門（安定同位体の食物網）についてもっと論文を読んで勉強する必要があると感じました。

Rian Prasetia（琉球大学）：私のデータの伝え方や研究に有用な新しいアイデアを得ることができました。ほかの研究者との意見交換をすることができ、博士号取得後にポスドク研究者として研究を続けていくうえで重要な幅広い人脈を築くことができたことはとても貴重でした。

Laddawan Sangsawang（静岡大学）：私は大規模な白化が起き重油流出や陸域からの影響が大きいタイ湾のサンゴ礁のモニタリングを行っています。ICRSではサンゴの白化、サンゴ礁生物群集、微生物相互作用、サンゴ加入のセッションを聴講し、私のタイでの研究に活用できる多くのアイデアをいただきました。

Md. Shafiul Alam（静岡大学）：私はセッション36に参加し、新しい考え方、知識、技術を学ぶことができました。多くのセッションのうちこのセッションを選んだことは、自分の研究・発表にもとても有益でした。特に一会場で全てのポスターが閲覧できたことはとても楽しい経験でした。

Rumana Sultana（静岡大学）：ICRSではセッション36に参加し、新しい情報や考え方を多くの研究者の方々からいただきました。またJCRSのブースの運営に関わり、JCRSに興味を持った他の国の人と会ったことは良い経験でした。JCRSとその活動について人々に広められたことは嬉しく思います。

写真２：口頭、ポスター発表の様子。（左上）伊藤早織、（左下）湯淺英知、（右上）Rumana Sultana、（右下）Rian Prasetia

編集後記 Editor's postscript

この夏、サンゴ礁のおもしろい発見はあったでしょうか。
興味深い情報をお持ちの方は、ぜひ、広報委員へお寄せ下さいませ。

編集担当　本郷

JCRS Japanese Coral Reef Society
2016年8月25日発行
日本サンゴ礁学会ニュースレター　［2016年8月］
Newsletter of Japanese Coral Reef Society No.70
● 編集・発行人／「日本サンゴ礁学会広報委員会」
梅澤・Agostini・井口・磯村・栗原・酒井・鈴木（豪）・高野・中嶋・浪崎・樋口・本郷・安田・湯山
● 発行所／日本サンゴ礁学会　● 事務局／茅根 創　＜kayanne@eps.s.u-tokyo.ac.jp＞
〒113-0033　東京都文京区本郷 7-3-1　東京大学大学院 理学系研究科 地球惑星科学専攻　Fax：03-3814-6358

日本サンゴ礁学会ニュースレター・Newsletter of Japanese Coral Reef Society No.70（2016年8月）発行日／2016年8月25日　編集・発行／日本サンゴ礁学会広報委員会